Encounter with Mozart's Child Violin モーツァルトの神童ヴァイオリンを聴く会

Hiroka Matsumoto (Violin) Michio Kobayashi (Harpsichord) 松本紘佳(ヴァイオリン) 小林道夫(チェンバロ)

Friday, 11 December 2009 The National-Art Center, Tokyo 国立新美術館(東京・六本木)

Presented by International Mozarteum Foundation Salzburg The National-Art Center, Tokyo The Yomiuri Shimbun TBS Sponsored by The Dai-ichi Mutual Life Insurance Company In cooperation with Japan Mozart Research Institute Nippon Music Foundation Video Promotions Inc Supported by Embassy of the Republic of Austria in Japan



Dear Friends of the Mozarteum Foundation Salzburg,

I would like to warmly welcome you to this extraordinary concert of the Mozarteum Foundation Salzburg and thank you for being here.

Today is a happy and important day to me: Every year, thousands of people from all over the world travel to Salzburg to visit Mozart's heritage which is preserved by the Mozarteum Foundation. It is not only a special event but also an important personal concern of mine to demonstrate with today's concert the counterpart to this rule: This time it is the Mozarteum Foundation Salzburg who comes to visit you in Japan, carrying one of the most valuable pieces of Mozart's possession in our luggage. It is a great honour to us that in this concert a young music talent from your country plays on the original child violin of Wolfgang Amadeus Mozart and that this event not only rounds off the Japan Year 2009 in Austria but also continues a established tradition and friendship.

Japan has been playing an important role in the history of the Mozarteum Foundation Salzburg for many decades: Let me first mention in this context the reconstruction of Mozart's Residence in 1996, which had been destroyed in World War II. This huge project could only be financed with the generous support of the Japanese insurance company Dai-ichi Mutual Life. I therefore would like to specially greet and thank Mr. Katsutoshi Saito, president of the Dai-ichi Mutual Life. I would also like to greet Prof. Bin Ebisawa, president of Japanese Mozart Research Institute, for his long lasting support and solidarity with the Mozarteum Foundation Salzburg. Please let me also express my gratitude to Kazuko Shiomi, president of Nippon Music Foundation, and her husband Keisuke Egashira who contributed to the organisation of this concert with great engagement in a most significant way. Thank you as well to the cooperation partners the National Art Center Tokyo, the Yomiuri Shimbun, TBS and Video Promotions.

Sincerely yours

Dr. Johannes Honsig-Erlenburg President, International Mozarteum Foundation Salzburg 皆様

ザルツブルク国際モーツァルテウム財団主催のこの特別な 演奏会にお越し頂き、心から感謝申し上げます。

毎年、たくさんの方々が当財団の保管するモーツァルトの 遺産を観るために、世界中からザルツブルクを訪れて下さいま すが、今回はそれとは逆に、我々が日本を訪れるという、当財 団にとりましても、私個人にとりましても特別な出来事であり まして、モーツァルトが生前に所有していたものの中でも最も 貴重な楽器を、手荷物として大切に日本まで持って参りました。 日本の皆様に、この楽器をご披露できる機会となりました本日 は、私にとりまして幸運かつ大切な日であるといえます。

このコンサートが、日本オーストリア交流年を締めくくる という時期に開催され、音楽的才能溢れる若い日本の演奏家が、 モーツァルトが子供の頃に実際に弾いていた小型のヴァイオリ ンで演奏するということは、両国間に既に確立されている伝統 と友好を継承していくという意味合いで、私達にとり大変に名 誉なことであります。

日本は、ザルツブルク国際モーツァルテウム財団史の中で 数十年にわたり、重要な役割を果たして下さいました。第二 次世界大戦によってモーツァルトの住家は破壊されましたが、 1996年に行われた復元は、第一生命保険の寛大な支援によっ てのみ可能であったといえます。ここに第一生命保険の斎藤勝 利社長に対し、心より感謝申し上げます。

また、多年にわたり当財団との固い相互協力関係を築かれ た日本モーツァルト研究所所長海老澤敏教授にも感謝の意を表 すると共に、今回のコンサートを開催するにあたり、多大なる ご尽力をいただきました日本音楽財団の塩見和子理事長、夫君 の江頭啓輔氏の両氏にも御礼申し上げます。最後に、国立新美 術館、読売新聞東京本社、TBS、ビデオプロモーションの皆様 に対しましても、心より感謝を申し上げます。

> ザルツブルク国際モーツァルテウム財団 総裁 ヨハネス・ホンジッヒ・エァレンブルク



Already the thought that the original child violin of Wolfgang Amadeus that never before had left the country is being brought to Japan and played by a young Japanese girl is exciting. Seeing it, listening to it, coming in contact with this priceless instrument will be a never to be forgotten experience.

I am thankful that in cooperation among International Mozarteum Foundation Salzburg and the Japanese partners including the National Art Center Tokyo, the Yomiuri Shimbun, TBS, Dai-Ichi Life, Japan Mozart Research Institute, Nippon Music Foundation and Video Promotions, this unique project has been made possible. I am extremely happy that this precious present is being displayed to a Japanese public whom I have experienced as ardent lovers of Mozart's music. Finally, in this Austria-Japan Year when our two countries are celebrating 140 year's of diplomatic relations, it comes as final climax and confirmation of our good relations deeply rooted in mutual appreciation and respect.

> Jutta Stefan-Bastl Austrian Ambassador

ヴォルフガング・アマデウスが子供時代に使用したヴァイ オリンは、これまでオーストリア国外へ持ち出されたことはあ りませんでした。この度、このヴァイオリンが日本にもたらさ れ、一人の少女によって演奏される事は素晴らしい事です。楽 器をご覧頂き、演奏をお聴き頂く、この大変貴重な触れ合いは、 生涯忘れられない経験になることでしょう。

ザルツブルク国際モーツァルテウム財団と、国立新美術館、 読売新聞、TBS、第一生命、日本モーツァルト研究所、日本 音楽財団、ビデオプロモーションの日本のパートナーのご協力 により、この唯一無二のプロジェクトが実現できましたことに 感謝いたしますとともに、モーツァルトの音楽を熱烈に愛して 下さる日本の皆様に、この大切な贈り物をご披露できますこと を大変喜ばしく思っております。最後になりましたが、今年は オーストリアと日本の修好 140 周年を記念する日本オーストリ ア交流年にあたります。本プログラムはその最後のクライマッ クスであり、敬意ある相互理解に基づいた友好関係を再確認す るにふさわしい機会となりました。

> 駐日オーストリア共和国 特命全権大使 ユッタ・シュテファン=バストル

Program

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

チェンバロとヴァイオリンのためのソナタ ハ長調 K6 (パリ・ソナタ 第1番)

Sonata for Harpsichord and Violin in C Major, K6 (Paris, 1764, Op.I-1)

- I Allegro
- II Andante
- III Menuetto I And II
- IV Allegro Molto

チェンバロとヴァイオリンのためのソナタ ト長調 K11 (ロンドン・ソナタ 第2番)

Sonata for Harpsichord and Violin in G Major, K11 (London, 1764, Op.III-2)

- I Andante
- II Allegro
- III Menuetto

チェンバロとヴァイオリンのためのソナタ ニ長調 K29 (ハーグ・ソナタ 第4番)

Sonata for Harpsichord and Violin in D Major, K29 (The Hague, 1766, Op.IV-4)

- I Allegro Molto
- II Menuetto



W.A.Mozarts Kindergeige (W.A.Mozart's Child Violin) The violin which Wolfgang Amadeus Mozart used as a child. Salzburg, 1746 by Andreas Ferdinand Mayr



松本紘佳(ヴァイオリン) Hiroka Matsumoto (violin)

1995年生まれ。4歳からヴァイオリンを始め、8歳で東京 とブダペストにおいてリサイタルを行う。2006年第10回ヴィ エニャフスキ・リピンスキ国際コンクール第2位。2007年第 61回全日本学生音楽コンクール小学校の部全国第1位。2009 年4月に津田ホールでリサイタル開催。2009年5月にドイツ・ クロンベルグアカデミーにてユーディ・メニューイン賞を、8 月にいしかわミュージックアカデミーにてIMA音楽賞を受賞。 2008年以降、東京交響楽団、神奈川フィルハーモニック管弦 楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団とサントリー ホール、みなとみらい大ホール他で共演。フランツ・リスト室 内合奏団とブダペストにて共演。

現在、原田幸一郎、ジェラール・プーレ両氏に師事。マス タークラスにおいてアナ・チュマチェンコ、オレグ・クリサ、 ナムユン・キム、クシシトフ・ヴェグジン各氏よりアドヴァイ スを受けている。2009 年度ヤマハ音楽振興会奨学生。現在中 学2年生。

Born in 1995, Hiroka began to play violin at the age of four. She gave her first recital in Tokyo and Budapest when she was eight years old. She was awarded many prizes including Second Prize at the 10th Wieniawski and Lipinski International Competition in Poland in September 2006; First Prize at the 61st Student Music Competition in Japan in December 2007; the Yehudi Menuhin Next Generation Award from Kronberg Academy in Germany in May 2009; and the IMA Music Award from Ishikawa Music Academy in Japan in August 2009. She has been awarded a scholarship for the fiscal year 2009 from the Yamaha Music Foundation.

Her work includes many solo recitals, appearing as a soloist with Tokyo Symphony Orchestra at Suntory Hall, Tokyo City Philharmonic Orchestra at Hitomi Memorial Hall, Kanagawa Philharmonic Orchestra at Minato Mirai Hall, and Liszt Ferenc Chamber Orchestra in Budapest.

Since 2007 Hiroka has been studying with Koichiro Harada and Gerard Poulet and attending master classes and lessons with notable violinists including Ana Chumachenco, Oleh Krysa, Nam Yun Kim, and Krzystof Wegrzyn.



小林道夫(チェンバロ) Michio Kobayashi (harpsichord)

東京藝術大学音楽部楽理科卒業後、デトモルト音楽大学 に留学。帰国後は、チェンバロとピアノの独奏および伴奏、 室内楽、指揮など多方面にわたる活躍を続けている。これまで にディートリヒ・フィッシャー=ディースカウ(バリトン)、 ジャン=ピエール・ランパル(フルート)、ヨーゼフ・スーク (ヴァイオリン)、ピエール・フルニエ(チェロ)など世界屈指 の演奏家と共演し、世界各地で高く評価されている。

1970年第一回鳥井(サントリー)音楽賞、1972年ザルツ ブルク・国際モーツァルテウム財団の記念メダルを受賞してい る。現在、大分県立芸術文化短期大学客員教授。

After graduating from the Tokyo University of Fine Arts and Music and the Hochschule für Musik Detmold, Michio Kobayashi gained recognition for his wide range of activities as a harpsichordist, a pianist, a chamber musician and a conductor. He has performed with many renowned artists including Dietrich Fischer-Dieskau (baritone), Jean-Pierre Rampal (flute), Josef Suk (violin) and Pierre Fournier (cello).

He has been awarded several prestigious prizes including the Suntory Music Award in 1970 and the Mozart Medal from International Mozarteum Foundation Salzburg in 1972. Currently he serves as the guest professor of the Oita Prefectural College of Arts and Culture.

本日の使用チェンバロ French double manual harpsichord After Blanchet 1730 William Dowd・Paris 1982



日本モーツァルト研究所所長 海老澤 敏

神童モーツァルトのヴァイオリンを聴く

西洋音楽史上、いや世界史上、とりわけ神童の名をほしい ままにしているのはヴォルフガング・アマデーウス・モーツァ ルトを措いて他にはないだろう。その神童ぶりはおよそ伝説的、 いや神話的でさえあるが、確実な資料の裏づけを踏まえたもの も豊富である。その一つは童子ヴォルフガングが残した小さな ヴァイオリンをめぐる逸話の数々である。

ヴォルフガンゲルルは6歳の時、父レーオポルトから4分 の1と2分の1のヴァイオリンのちょうど中間程の大きさの、 いわゆる〈ヴィオリーノ・ピッコロ〉に類する楽器を与えられ た。最初期の伝記にはそれをヴィーン初訪の折に貰ったとある が、これは正確ではなく、ザルツブルクの弦楽器製作者アンド レーアス・フェルディナント・マイヤーが1746年、すなわちモー ツァルト生誕10年前に作った楽器であった。この楽器でモー ツァルトはさまざまなエピソードを生み出して行く。

父親のレーオポルトが手紙で語っているようにヴィーン手 前の税関での検査がスムーズに運んだのはこのヴァイオリンの 演奏のお蔭であったし、ヴォルフガングがなついていたトラン ペット奏者ヨハン・アンドレーアス・シャハトナーが回想して いるエピソードも、この小さなヴァイオリンと関係づけられる。 この小父さんと遊ぶ時、いつもヴァイオリンが弾かれたし、こ の小父さんのヴァイオリンの調弦がいつも自分の小さなヴァイ オリンよりも8分の1音低くなっていると指摘したのも幼児の ヴォルフガングだった。

その幼いモーツァルトがチェンバロばかりでなくヴァイオ リンでも信じがたいほどの名技を西方への大旅行中でも披露し たことが伝えられている。

1763 年 7 歳の時から 1766 年 10 歳まで足掛け 4 年のその 大旅行中に、彼ヴォルフガングは数多くのクラヴィーアとヴァ イオリンのためのソナタを作曲している。 パリで4曲のソナタをクラヴィーア(チェンバロ)とヴァ イオリンのために作曲し、最初の2曲(K6,K7)をルイ15世 の王女ヴィクトワールに、あとの2曲(K8,K9)を侍女テッ セ伯爵夫人に献呈したほか、次の訪問地ロンドンでは国王 ジョージ3世の妃シャーロット・ソフィーに6曲のソナタ集 (K10~K15)を献じている。このソナタ集はチェンバロと ヴァイオリン(またはフルート)用の二重奏ソナタとチェロを 加えた三重奏ソナタの二つの版が、これも父レーオポルトの 手で刊行された。そのあとモーツァルト一家はふたたびドー ヴァー海峡を渡り、オランダを訪ねたが、そのハーグの町で、 やはり6曲の二重奏ソナタ(K26~K31)が作曲され、レー オポルトはこの曲集を版刻出版し、総督ヴィレム5世の姉カロ リーネ・ヴァン・ナッサウ=ヴァイルブルク侯妃に捧げている。

今夕披露される3曲はこうしたいわゆる〈パリ・ソナタ〉、 〈ロンドン・ソナタ〉そして〈ハーグ・ソナタ〉からそれぞれ 1曲で、《ハ長調 K6》の作品はモーツァルトがまず試みた多 楽章ソナタとしてはまさに最初の曲で四つの楽章をもち、パリ で完成された作品である。2曲目は〈ト長調ソナタ K11〉で、 既述のように現在《新モーツァルト全集》版ではチェロを加え た三重奏ソナタの形で刊行されているが、従来はチェロを加え ない二重奏ソナタ、しかもヴァイオリンまたはとりわけフルー ト・ソナタの形で知られていた。三つの楽章をもつがアンダン テで始められ、終楽章のメヌエットのあとに第2楽章アレグロ がダ・カポして繰り返される。3曲目は2楽章制でメヌエット はトリオを伴なっている。

モーツァルトが幼少年の頃愛用したこの小さなヴァイオリ ンはモーツァルトの死後、19世紀に一度修復され、その後国 際モーツァルテウム財団の所蔵に帰したが、長い間演奏に用い られることがなく、生家に展示されていた。1998年、ふたた び修復され、当時の天才少女ヴァイオリニスト、マリーア・エ リーザベト・ロットによっての演奏がCDに収録されたが、海 外に持ち出され、コンサートでこの楽器が披露され、しかも モーツァルトの最初期のソナタが宮廷で初めて御前演奏で鳴り 響いてから2世紀半以上もの歳月を経て紹介されるのは今回が まさに最初のことである。

Bin Ebisawa President, Japan Mozart Research Institute

Infant Prodigy's Sonatas With His Own "Kindergeige"

Wolfgang Amadeus Mozart was indeed none other than an extraordinary infant prodigy to ever exist in the Western music history, nay, far from that, in the whole history of the world. And the way he is depicted as a prodigy is legendary, or even mythological, but, at the same time, various anecdotes narrated about him are richly based on factual data and accurately proven. Some episodes reported around him with his small violin are of this kind.

At the age of six, Wolfgangerl was given by his father Leopold, a small violin of the size between a quarter violin and a half violin, usually called "il violino piccolo" at that time. One of his earliest biographies says that this small violin was given to him in Vienna at the time of his first visit to the metropolis. But this description is not correct, because this violin was made in Salzburg in 1746 which is ten years before his birth, by Andreas Ferdinand Mayr, a violin maker of Salzburg. And with this very violin, Mozart gave birth to various episodes and anecdotes.

As his father Leopold tells us in his letter, the Mozart family was able to pass very easily through customs to get to the city of Vienna because of Wolfgangerl playing this small violin in front of the customs officer. And the recollections of Johann Andreas Schachtner, a trumpet player of the court orchestra and to whom Wolfgangerl became much attached, tells very impressive episodes closely connected to this violin. When Wolfgangerl was amusing with Schachtner, they would play violins in turns. The boy pointed out to Schachtner, who played also a violin in the court orchestra, that his violin was tuned always one eighth lower pitch than Wolfgangerl's own small violin.

It was reported that the child Mozart showed during his grand tour to Western countries of Europe quite astounding virtuosity playing not only the harpsichord but also this small violin.

During this grand tour between 1763-1766, little Mozart composed numerous sonatas for harpsichord and violin. At first in Paris he finished two of his first sonatas (K6, K7) and Leopold engraved and published them as Opus I and dedicated them to Princess Madame Victoire de France, Royal Princess of Louis XV. They were followed by two other sonatas (K8, K9) which were also dedicated to Madame la Contesse de Tessé, waiting woman of Madame Victoire. When the Mozart family visited London, Wolfgang composed six sonatas for harpsichord, violin and violincello (K10-K15) and dedicated them to Queen Charlotte Sophie, wife of George III. These sonatas have two versions, one without cello (duet version) and another with cello (trio version). After leaving England the Mozart family visited Holland and in the city of Hague, Leopold published another set of six sonatas (K26-K31) by his son and presented them to Princess Caroline van Nassau-Weilburg, the eldest sister of Willem V van Nassau, the governor of the Netherlands.

This evening, three sonatas have been chosen from the "Paris Sonatas", "London Sonatas" and "The Hague Sonatas". "C-major Sonata" K6, which is the earliest sonata ever written in his life, has four movements. Then follows the "G-major Sonata" K11 which, as already explained, has two versions, one with cello and another without cello. The latter version was more favoured especially when played with a flute. It has three movements starting with Andante, then comes Allegro which is played again after the third movement Menuetto. And the last one has only two movements and ends with Menuetto and Trio.

Wolfgangerl loved this violino piccolo which has been restored once in the nineteenth century and is owned by the Mozarteum Foundation, but since then remained unplayed and exhibited in the Geburtshaus. It was restored again in 1998 and Maria Elisabeth Lott, a very young violinist, recorded one concerto rondo and some violin sonatas of the later periods. But tonight is really the auspicious occasion that this Mozart's "Kindergeige" (child violin) is sent abroad to play his earliest pieces for the first time in two hundred years since Wolfgangerl has played them in front of distinguished personalities such as Empress, King, Queen and others.

È	催	ザルツブルク国際モーツァルテウム財団
		国立新美術館
		読売新聞東京本社
		TBS
特別協賛		第一生命保険 (相)
協	力	日本モーツァルト研究所
		脚日本音楽財団
		㈱ビデオプロモーション
徬	援	オーストリア大使館